

個の主権と共同体

- トマス・アキナスにおける人間的行為の普遍性 -

佐々木 亘

The Person's Dominion and the Community

- On the Universality of Human Action in Thomas Aquinas -

Wataru Sasaki

According to Thomas Aquinas, man is master of his actions, and on this point, man is different from other animals which are irrational. Man is a personal being as far as he has dominion over his actions. On the other hand, man is a kind of social being. According to Thomas, it is evident that all who are included in a community stand in relation to that community as parts to a whole, so that whatever is the good of the part can be directed to the good of the whole. We need the community because we are parts of it. However, man has some transcendence as person. Therefore, man is the transcendent part in the community. And while moving towards happiness, man is like a personal pilot of his own movement. I propose the community provides the sphere of personal movement, and makes it possible for each person to move himself. Man can be a human being only in a community.

Key Words: [the unique of human being] [the necessity of ultimate end] [man's movement to ultimate end] [the universality of human action] [the necessity of human action]

(Received September 15, 2005)

序

人間とは何であろうか。人間は動物である。生物学的に限定して捉える限り、人間は動物の一種として埋没しかねない。事実、サル学が盛んである現在、人間をサルの延長上に観ようとする試みさえなされており、「サル学、ロボット学、生命科学からなるトライアングル包囲網」が「人間学の存立を根底から脅かしている」⁽¹⁾。昨今、人間としての尊厳を問わずにいられないような事例は、枚挙の暇もない。人間とサルとの、あるいはロボットとの境界が曖昧になればなるほど、人間としての存在に何らかの必然性を見出すことは、ますます困難になるであろう。

では、人間を他の諸動物から区別するところのものは、いったい何であろうか。哲学にこの答えを探ろうとするならば、まず、「理性的」や「社会的・共同体的」という言葉にたどり

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番地1号）

着くように思われる。人間は単なる動物ではなく、「理性的な動物」であり、「社会的・共同体的な動物」である。人間は、「理性的な能力」を有しており、その結果、「個別的」であると同時に「社会的・共同体的」なのである。

たしかに、人間はその「理性」に即して独立的な行為を営む「個」であり、それぞれ個別的な仕方では自己の行為に係わっている。人間の行為の意味は、通常、その行為者に帰せられる。この点が、倫理を考える上での大前提である。その一方、人間が人間として生きていくためには、何らかの共同体を必要としている。人間は、様々な共同体の一員として自己を位置づけており、どこの共同体に属しているかということは、その人間にとって、本質的な事柄である。

このように、人間は理性を有するがゆえに、「個別的な人格」であると同時に「共同体的な存在」である。では、「個」と「共同体」とは、本来、どのように関係しているのだろうか⁽²⁾。トマスは、『神学大全』第二 - 二部第五八問題の第五項で、「正義 (iustitia) は一般的徳 (virtus generalis) であるか」を論じており、その主文で、個と共同体の関係について、次のように言っている

或る共同体の下に含まれる者はすべて、全体に対する部分として、その共同体に関係づけられることは明らかである。じっさい、部分とは全体に属するところのものであり、それ故、いかなる部分の善も全体の善へと秩序づけられ得る⁽³⁾。

共同体とは、「全体」に他ならない。しかも、そこに含まれている人間がすべて「部分」として位置づけられ、そこへと部分の善が全体の善へと秩序づけられるような仕方では関係づけられるところの「普遍的な全体」である。逆に、何らかの共同体に属する限りにおいて、個々の人間は「部分」として、しかも自らの善が共同善へと秩序づけられるところの「個別的な部分」として、位置づけられることになる。

このようにトマスにおいて、「個」である人間とその者が属する「共同体」との関係は、「部分」と「全体」の関係として捉えられている。では、「部分とは全体に属する」限りにおいて、しかも「いかなる部分の善も全体の善へと秩序づけられ得る」ことに即して、人間の個的な性格は、「共同体に属する部分となり得る限りにおいて個的である」という仕方では、共同体に吸収され、解消されるのであろうか。

I . 人間的行為の個別性

まず、人間の個別性とは、そもそも何を意味するのであろうか。トマスにおいて、人間は何よりも「自らのはたらきの主 (suorum actuum dominus)」として位置づけられている。主著である『神学大全』の第二部では、人間の倫理が「運動」として論じられているが、その冒頭である第二 - 一部第一問題第一項の主文では、次のように言われている。

人間によって為される「行為 (actio)」の中で、人間である限りの人間に固有な行為だけが、本来的な意味で「人間的 (humanus)」と言われる。しかるに、人間が他の非理性的被造物

から異なっているのは、「自らのはたらきの主」であるという点においてである。従って、人間がその「主 (dominus)」であるところの行為が、本来、「人間的」と呼ばれる⁽⁴⁾。

「自らのはたらきの主である」ということが、非理性的被造物から人間を区別するところの、行為に関する人間の「固有性」であり、この「主権」は、「理性」と「意志」、或いは両者の機能である「自由意思」に基づいて成立している⁽⁵⁾。そして、人間が自らのはたらきの主である限り、その行為は、人間である限りの人間に固有な「人間的行為 (actio humana)」として位置づけられる。これに対して、人間の固有な能力に基づいてはいない場合の行為は、本来、「人間的行為」にあたらない。このように、「人間が自らのはたらきの主である」ということは、トマスにおいて、その倫理的考察の「出発点」とも言うべき、極めて重要な規定である。

しかるに、「主」という言葉は、トマスにおいて、単なる「能動性」を意味するわけではない。主であるということとは、「僕 (servus)」のような、自らの権力によって拘束される者との「関係」に基づいて成立している。それは、「能動と受動の関係」である⁽⁶⁾。それゆえ、「はたらきの主」の場合も、そこにかかる能動と受動の関係が何らかの仕方で認められなければならない。

さらに、人間は、「自らによって自らを動かす」という仕方で、目的へと向かっている。すなわち、この「目的への運動」は、「動かす自己」と「動かされる自己」との区別に基づいて、「能動と受動の構造」のもとに、成立しているのである⁽⁷⁾。自らのはたらきに関する主権とは、「自らの意志によって動かされる」という「受動」に基づくところの、「能動性」に他ならない⁽⁸⁾。

このように、「人間的行為の固有性」に基づいて、人間は「自らのはたらきの主」として位置づけられる。このことは、何よりも、人間がペルソナとしての人格的存在であることを意味していると言えよう。この「ペルソナ (persona)」という言葉は、三位一体に関する神学的な用語であるが、この言葉が人間の根本的な規定に用いられているということ自体に、大きな意味があると考えられる。トマスは、第一部第二九問題第一項の主文で、「理性的本性を有する個別実体 (rationalis naturae individua substantia)」というペルソナの定義に関して、次のように言っている。

自らのはたらきの「主権 (dominium)」を持ち、他のもののように単に動かされるだけではなく、自体的にはたらくところの、「理性的実体」においては、「個別的」、「個的」なものが、何らかの「より特別」、「より完全」な仕方で見出される。じっさい、諸行為は「単一者」(singularia)のうちに存する。したがって、他の諸実体の中で、理性的本性を持った単一者は、何らかの特別な「名」を有する。そして、この名が「ペルソナ」である⁽⁹⁾。

ペルソナとは、諸実体の中で、理性的本性を有する者だけに許された「名」であり、「自らの行為の個別性」がその前提になっている。ペルソナの定義に係わる「個別性」とは、何よりも、自己の行為に関する主権を持って自体的にはたらくこと、すなわち「自らによって自らを動かすこと」を意味している。

これに対して、理性を欠いたものは、「目的としての性格を認識しないから、何も目的へと秩序づけることはできず、ただ他の者から目的へと秩序づけられるだけ」であり、「自らによってではなく他の者から動かされるように、自然本性的な傾きによって目的へと向かう」⁽¹⁰⁾。すなわち、それらは理性を有していないので、何かを目的としての性格のもとに認識することができず、その結果、何かを為すとしても、それは内的な傾きによって限定されて動かされているにすぎない。したがって、それらは厳密な意味で「行為の主体」とはなり得ない。この意味で、「自体的にはたらく」という「行為」は、自らのはたらきの主であるところの「単一者」によってのみ可能なのである。

Ⅱ．人間的行為の普遍性

かくして、人間は、「自らのはたらきの主」である限りにおいて、「理性的本性を有する個別実体」であり、「ペルソナ」としての「単一者」である。しかし、「人間的」ということと「個別的」ということとは、単純に「同義」であるとは言えない。たしかに、個々の人間的行為は、それ自体として「個別的」である。しかし、その行為に何らかの「普遍性」が認められなければ、それに関する倫理的考察も成立し得ないように思われる。では、人間的行為にはいかなる「普遍性」が見出されるのであろうか。

人間は、自らのはたらきに関する主権を有しており、この主権は「自分自身を目的へと動かす」という運動に係わる。じっさい、「意志の対象は、目的かつ善 (finis et bonum) である」から、「すべての人間的行為は目的のために (propter finem) あるものでなければならない」⁽¹¹⁾。人間は理性と意志によって自らのはたらきの主であり、人間的行為は理性と意志という「能力」によって原因づけられる。そして、意志の対象が「目的」であり、人間的行為は、「目的のために」という仕方で、意志から原因づけられることになる。

したがって、まず人間的行為の個別性とは、かかる「目的への運動」そのものの個別性を意味していると言えよう。すなわち、人間は、自らの主権のもとに、様々な種々異なった仕方で目的へと向かっており、人間がその主である限りにおいて、人間には他に還元されない個別性が帰せられるのである。

その一方、人間的行為の普遍性は、「目的」の側から捉えられるように思われる。トマスは、第二 - 一部第一問題第三項で、「人間的はたらきは目的から種 (species) を受け取るか」を論じており、その主文で次のように言っている。

「人間的行為」は、「能動」という仕方で観られるにせよ、「受動」という仕方で観られるにせよ、いずれの仕方で「目的」から「種」を獲得する。実際、人間的行為は、どちらの仕方で観られ得るのであり、それは即ち、「人間が自分自身を動かす」、そして、「人間が自分自身によって動かされる」ということに基づいてである⁽¹²⁾。

個々の「運動」がどういう「種」に属しているかは、運動の「現実態」から決められる。しかるに、運動は「能動」と「受動」に分けて捉えられるから、運動の種的性格は、それぞれの

現実態から決定される。そして、人間がその主であるところの人間の行為は、自分自身を目的へと動かすことによって成立しており、そこには、「自らを動かす」という「能動的な側面」と、「自らが動かされる」という「受動的な側面」の、両方が見出され得る。したがって、人間の行為は、「人間の行為を動かす根源としての目的」からも、「人間の行為がそれへと動かされる終局としての目的」からも、それぞれ「種」を獲得することになる。

「人間の行為が種を獲得する」ということは、この場合、「各々の行為がいかなる種に帰属せしめられるか」という仕方で、それぞれ倫理的な性格が確定する」ことを意味している。人間の行為の倫理性は、その行為が「如何なる目的から発せられたか」、そして、「如何なる結果を目的としているか」ということから決定されるのであり、「何を目的として動かし、動かされるか」という点に、人間の「倫理的地平」は広がっている。

しかるに、このことは、人間の行為が「個」ではなく「種」という、より普遍的な次元で捉えられることから可能になると言えよう。たしかに、人間は自己のはたらきに関する主権を有しており、自体的・個別的・個的な仕方で目的へと自らを動かしている。この限りにおいて、いかなる人間の行為も個別的な仕方で成立している。しかし、運動そのものは「個的」であるとしても、その目的においては「種的」であり、たとえば「賞賛すべき」、「非難すべき」という仕方で、その倫理的な性格が「種」において決められるのである。

したがって、人間の行為の普遍性は、その「目的」に即して捉えられる。人間の行為は、「人間が自分自身を動かす、そして、人間が自分自身によって動かされる」という運動を意味するが、この運動は、それがペルソナである「単一者」に基づく限りでは「個的」であるとしても、その行為が「どのような目的によって為されるか」、「どのような目的へと為されるか」という観点から捉えられる限り、何らかの仕方で「種的」なのであり、そこに倫理的な「普遍性」が認められるのである。

Ⅲ．人間の運動における普遍性

人間の行為は、「個別的」であると同時に「普遍的」である。そして、人間のペルソナとしての個性は、自らはたらきに関する主権に即して捉えられると同時に、その主権は目的への運動に係わっている。したがって、人間存在そのものも、ペルソナとしてはまったく個別的であるが、目的への運動という観点からは、何らかの「普遍性」をもって捉えられ得ると考えられる。

では、この「普遍性」とは何を意味するのであろうか。まず、すべての人間は、「理性と意志によって自らはたらきに関する主権を有している」という点において共通している。人間はすべて、それぞれ個別的な仕方で、自らはたらきの主である。この限りにおいて、かかる「普遍性」とは、「はたらきの主権に関する普遍性」を示している。このことがまた、倫理的考察の大前提であると言えよう。すなわち、いかなる人間でも、理性と意志による限り、自らはたらきの主であり、この行為の倫理的な性格は、その目的から種を獲得するという仕方で、その行為者に個別的に帰せられるわけである。

つぎに、自らはたらきの主としてそれぞれ目的へと運動しているという点において、すべ

ての人間は共通している。たしかに、運動そのものは個別的である。しかし、「目的のために」という点で、すべての人間的行為は形式的に一致している。意志の対象が目的であるから、人間的行為は何らかの「善」を目的とすることなしに成立し得ない。このような運動の構造そのもののうちに、根源的な普遍性を認めることができる。

さらに、前章で確認したように、目的そのものに関して、ある種の普遍性が見出される。それは、行為の倫理性が目的に即して種的に区別される限りにおける普遍性である。どういう目的によって為されているか、何を目的として為されているか、という点から、人間的行為の倫理性は何らかの普遍性のもとに捉えられる。その結果、種々異なった行為を倫理的な観点のもとに分類することが可能になる。じっさいには様々な状況を考慮しなければならないとしても、倫理的な、あるいは法的な判断は、このような分類に基づいて可能になると言えよう。

さいごに、かかる運動には、「究極目的 (ultimus finis) への必然性」が認められなければならない。トマスによると、人間がその主であるところのものとは、行為の「選択 (electio)」であり、「選択は、目的ではなく目的へのてだてに係わる」一方、「究極目的への欲求は、我々がその主であることがらには属していない」¹³⁾。

人間的行為の種的性格は目的から受け取られるにもかかわらず、人間の主権は、目的ではなく、目的へのてだてに係わる場所の選択を対象としている。究極目的への欲求は、人間の主権の前提であるとしても、その対象ではない。トマスは、第一部第八二問題第一項の主文で、内的根源に基づく「自然本性的で絶対的な必然 (necessitas naturalis et absoluta)」に関して次のように言っている。

「自然本性的な必然」は意志に背馳しない。かえってむしろ、知性が必然に基づいて「第一基本命題 (prima principia)」に密着しているように、意志は必然に基づいて「至福 (beatitudo)」である「究極目的」に密着していなければならない¹⁴⁾。

「内在的根源に基づく必然」は、意志に背馳しないばかりか、意志は必然的な仕方では究極目的に結びついていなければならない。意志のはたらきは、究極目的への欲求に基づいて現実化されるのである。「究極目的への密着」は、意志にとって、その本性に即した「自然本性的で絶対的な必然」であり、意志のはたらきそのものの前提をなしている。

したがって、個々の人間の意志が至福である究極目的へと必然的な仕方では密着しているという点に、運動に関する最も根本的な普遍性が認められる。いかなる人間も、その人間的行為の根底には、究極目的への必然的な欲求が存している。すべての人間は、究極目的への必然的な欲求において、一致しているのである。

Ⅳ．個の意志と共同体

このように、人間は、ペルソナとしての「個」であり、自らはたらきに関する「主」である。理性と意志による限り、自らの行為をその主権のもとに方向づけることができる。しかし、自らを目的へと動かすという点で、その目的に即して行為の種的性格が受け取られるという点

で、さらに、至福である究極目的への必然的な欲求が意志のはたらきそのものの前提になっているという点で、すべての人間は共通している。したがって、「究極目的への運動」という観点から、自らののはたらきの主としての個別的な運動は何らかの普遍性のもとに捉えられ得ることになる。そして、かかる観点は、個と共同体の関係を探るうえで、非常に重要であるように思われる。

人間は、自らの理性と意志によって、自らののはたらきの主である。この限りにおいて、意志は、人間の個別性の根源である。その一方、究極目的への必然的な欲求において、すべての人間は共通している。それゆえ、意志の根源的な欲求のうちに、人間の普遍性が根源的な仕方では認められる。トマスは、第二 - 一部第一問題第五項で、「一人の人間に複数の究極目的が存し得るか」を論じており、その主文で次のように言っている。

人間の究極目的は、端的な仕方では人類全体へと関係づけられているように、この人間の究極目的はこの人間へと関係づけられている。それゆえ、すべての人間には自然本性的な仕方では一つの究極目的が属しているように、この人間の意志は一つの究極目的において存立している⁽¹⁵⁾。

究極目的とは、人間の意志が必然的、根源的な仕方では欲求するところのものである。その欲求とは、意志のはたらきそのものに即して認められる原初的かつ最終的な欲求であると言える。すなわち、究極目的とは、意志のはたらきの根源として、意志によって第一に欲求されるところのものであり、そのはたらきがそこにおいて静止されるという仕方では、意志の欲求を究極的な仕方では満たすところのものに他ならない。

しかるに、もしこのような究極目的が複数存するならば、その目的は「究極的」でないことになる。したがって、究極目的は一つでなければならない。さらに、このことは、「すべての人間がそこへと関係づけられる」という意味での「一」であると同時に、個々の人間においては、「この人間がそこへと関係づけられる」という意味での「一」でもあり得る。それゆえ、端的な仕方では人間の究極目的が人類全体に関係しており、自然本性的な仕方ではすべての人間に一つの究極目的が属しているように、この人間の究極目的はこの人間へと関係づけられ、この人間の意志は一つの究極目的において成立しているのである。

「すべての人間には自然本性的な仕方では一つの究極目的が属している」という点に、個の意志と共同体との根本的な関係が示されていると考えられる。究極目的とは、個々の人間の意志がそこにおいて「存立」するところの「根源」であると同時に、すべての人間の意志がそれへと自然本性的な仕方では関係づけられるところの「究極」に他ならない。自らののはたらきの主である限りにおける「ベルソナとしての個」と、そこに属する人間が部分として秩序づけられるところの「共同体としての全体」とは、「一なる究極目的への秩序」という仕方では、調和し得ると言えよう。

結び 共同体における個の主権

たしかに、人間を普遍的に捉えるということは、自己と他者が何らかの共通性において一致しているという次元から、人類という一つの「種」に至るまで、多層的に解される。そして、どの次元においても、かかる状況を「共同体」という言葉で表現することは可能であろう。じっさい、我々は、「家庭」という共同体の一員であると同時に、「人類共同体」の一員なのである。

さらに、自らを共同体の一員とするということは、自らをその共同体の部分として位置づけることに他ならない。しかも、単なる部分ではなく、部分としての個別的な善が「全体の善へと秩序づけられ得る」ところの、全体へと秩序づけられた「部分」でなければならない。たとえば、たまたまそこに乗り合わせた列車の乗客のように、部分と全体の関係が単なる偶然性や附帯性に基づく場合、そのままでは何らかの「集合体」であるとしても「共同体」としての全体であるとは言い難いであろう。逆に、家庭の場合も、もし、その成員が自らの善を家族全体の善へとまったく秩序づけなければ、共同体としての要件を実質的に満たすことにはならないように思われる。

人間は、究極目的への運動に即して、「主権を有する個」であると同時に、「共同体の部分」であり得る。すなわち、かかる運動に基づいて、人間はいかなる共同体にも還元されない個としての主権を有する一方、全体である共同体への秩序づけそのものも、この運動によって可能になり、その結果、個と共同体が「部分」と「全体」として相互に秩序づけられることができる。このことはまた、人間が自らの至福へと個別的な仕方に向かうところの「運動」そのものが、普遍的な全体である共同体において、本来、成立していることを意味しているように思われる。では、この場合の「秩序」とは、いったい何を意味しているのであろうか。

たしかに、「すべての人間には自然本性的な仕方の一つの究極目的が属している」ということから、究極目的は普遍性のもとに捉えられる。しかし、この「普遍性」は、人間的行為がそこから種を受け取るころの、目的における「普遍性」と次元がまったく異なっている。究極目的とは、人間の意志が必然的な仕方と密着している根源であるから、究極目的は人間的行為における必然的な普遍性である。それは、普遍的で必然的な「根源」であり、「終極」である。人間的行為は、かかる根源と終極の間に成立している⁶⁶。その一方、人間がそこから種を獲得するところの「目的」も、人間的行為の「根源」であり「終極」であるが、その「種としての普遍性」は必然的ではない。何を目的とするかが「必然的」であり、それが人間の主権に属していないなら、人間的行為に倫理性を問うことは不可能である。

共同体が有する「全体としての秩序」は、以上のような「必然性」と「非必然性」の関係から捉えられるのでないだろうか。共同体に部分として属することが必然的であるとしても、個々の人間は、ペルソナとしての個別存在であり、その主権は非必然的な普遍性に基づいている。この限りにおいて、人間の個別的な運動は、「必然的」であると同時に「非必然的」なのであり、その非必然性に、「主」であり「部分」である人間そのもののあり方がかかっているのである。

略号

S.T. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae* (『神学大全』) ed. Paulinae, Torino, 1988.
 佐々木 2005 佐々木 恒 『トマス・アキナスの人間論 - 個としての人間の超越性 - 』, 知泉書館。

註

- (1) 山折哲郎「宗教つれづれ：ヒトに姿を変えた人間」, 『読売新聞』2005年7月7日。
- (2) 筆者は、主に「個としての超越性」と「共同体としての普遍性」の双方からトマスの人間論を研究しており、このうち前者に関しては、文学博士の学位を取得して出版するに至った(佐々木2005)。また、後者に関しては、「自由の普遍性と正義の超越性 - トマス・アキナスにおける人間論の展望 - 」という研究課題で科研費(基盤研究C)の交付を受け、現在、「トマス・アキナスの共同体論」という論文にまとめるべく努力している。この論文は五つの部分からの構成を予定しており、本稿は、その第二部前半の議論に対応している。
- (3) S.T. II-II, q.58, a.5, c. Manifestum est autem quod omnes qui sub communitate aliqua continentur comparantur ad communitatem sicut partes ad totum. Pars autem id quod est totius est: unde et quolibet bonum partis est ordinabile in bonum totius.
- (4) S.T. I-II, q.1, a.1, c. Actionum quae ab homine aguntur, illae solae proprie dicuntur humanae, quae sunt propriae hominis inquantum est homo. Differt autem homo ab aliis irrationalibus creaturis in hoc, quod est suorum actuum dominus. Unde illae solae actiones vocantur proprie humanae, quarum homo est dominus.
- (5) 理性と意志、そして自由意思との関係に関しては、佐々木2005, pp.117 - 121参照。
- (6) 主と僕の関係に関しては、佐々木2005, pp.67 - 94参照。
- (7) 人間的行為の構造に関しては、佐々木2005, pp.126 - 134参照。
- (8) 佐々木2005, pp.168 - 170参照。じっさい、「似姿(imago)」と「主」という用語の分析を通じて、似姿の超自然本性的な完成へと至る人間的行為の可能性を、「似姿としての主」という点に見出そうとすることが、先の博士論文における大きなテーマであった。
- (9) S.T. I, q.29, a.1, c. Sed adhuc quodam specialiori et perfectiori modo invenitur particulare et individuum in substantiis rationalibus, quae habent dominium sui actus, et non solum aguntur, sicut alia, sed per se agunt: actiones autem in singularibus sunt. Et ideo etiam inter ceteras substantias quoddam speciale nomen habent singularia rationalis naturae. Et hoc nomen est persona.
- (10) S.T. I-II, q.1, a.2, c. Illa vero quae ratione carent, tendunt in finem per naturalem inclinationem, quasi ab alio mota, non autem a seipsis: cum non cognoscant rationem finis, et ideo nihil in finem ordinare possunt, sed solum in finem ab alio ordinantur.
- (11) S.T. I-II, q.1, a.1, c. Obiectum autem voluntatis est finis et bonum. Unde oportet quod

omnes actiones humanae propter finem sint.

- (12) *S.T. I-II, q.1, a.3, c.* Et utroque modo actus humani, sive considerentur per modum actionum, sive per modum passionum, a fine speciem sortiuntur. Utroque enim modo possunt considerari actus humani: eo quod homo movet seipsum, et movetur a seipso.
- (13) *S.T. I, q.82, a.1, ad 3.* Sumus domini nostrorum actuum secundum quod possumus hoc vel illud eligere. Electio autem non est de fine, sed de his quae sunt ad finem, ut dicitur in III *Ethic.* Unde appetitus ultimi finis non est de his quorum domini sumus.
- (14) *S.T. I, q.82, a.1, c.* Similiter etiam nec necessitas naturalis repugnat voluntati. Quinimmo necesse est quod, sicut intellectus ex necessitate inhaeret primis principiis, ita voluntas ex necessitate inhaereat ultimo fini, qui est beatitudo.
- (15) *S.T. I-II, q.1, a.5, c.* Sicut autem se habet ultimus finis hominis simpliciter ad totum humanum genus, ita se habet ultimus finis hominis ad hunc hominis. Unde oportet quod, sicut omnium hominum est naturaliter unus finis ultimus, ita huius hominis voluntas in uno ultimo fine statuatur.
- (16) 佐々木2005, pp.115 - 116参照。

本論文は、平成17年度科学研究費補助金（基盤研究C）による、研究成果の一部である。